大連港

ありし都の物語

城島國弘

ありし都の物語

大連港

城島國弘

大阪書籍

城島國弘（じょうじま　くにひろ）

1919年，大連市に生まれる。
大広場小，大連二中，二高文乙を経て，
1945年，東京大学経済学部卒業。
大蔵省理財局，ミュンスター大学・フライブルク大学各客員教授，名古屋大学経済学部教授を経て，
現在，名古屋大学名誉教授，中部大学教授，空間研究・国土計画アカデミー（ARL）会員（西独）。
経済学博士，農学博士（Dr. agr），フンボルト功労章，フライブルク大学功労章。

著書に『経済秩序の世界像』（東洋経済新報社，1967），『立体農業論』（東洋経済新報社，1974），『社会のライフ・サイクル』（名古屋大学経済学会，1981），『日本病診断』（地球社，1982），"Ökonomie und Physik" (Duncker & Humblot, Berlin, 1985) など。この他にも，日本と西ドイツで出版された著書，編著書，訳書が多数ある。

大連港——ありし都の物語

一九八六年三月二〇日　第一刷発行

著　者　城島國弘
発行者　松田興人
発行所　大阪書籍株式会社
〒537　大阪市東成区深江北二—一—一
電話　（〇六）九七四—二四六一
振替　大阪九—四三二五
印刷・製本　大阪書籍株式会社

©K. Jojima 1986

ISBN4-7548-5001-7

はしがき

かつて一つのまちがあった。その名を大連という。おおらかで、陽の光と青雲の希望に溢れた名まえである。だが今では、若い世代の人達でなくとも、このまちの名は既に忘却の彼方にある。

大連は、遼東半島の南端に拓かれた港まちである。その背後には、北は黒竜江、東は鴨緑江、西は大興安嶺に限られた広大な満洲がある。広袤一三〇万平方キロメートル、日本国土の三倍に余る大地である。この天恵の可能性と寓意に満ちた豊かな大陸は、かつては清朝三百年の祖法に護られた封禁の処女地であった。満洲は、やがてこの処女性の故に、血をもって喪失と新生の歓びを知らねばならない。それは、日本が世界史に登場してようやく四〇年、二十世紀も初めのことである。

封禁を破る歴史の展開は、屍山血河のリリシズムによって贖われた。この鉄血の詩はまた、戦乱の世界史における最後のリリシズムでもある。日本人にとって満洲の回想が、慟哭の赤い夕陽に係がるのも故ないことではない。

この人為を超えた壮大な血の交わりの寓意によって、初めて満洲は現代にその姿を現わした。そこに生み出された最初の人生がこのまちである。

大連は美しい新約のまちだった。ここに渤海は尽きて、黄海はここに始まる。あくまでも碧い大海

の畔に、パリ風に展かれた街並みは、あの地中海に浮ぶ白い港のように、透き徹る陽光に息づいていた。ロシアと日本の混血が生み落した、果敢ない願いのメルヘンである。アカシアの森蔭に深々と隠れながら、眸のように輝くまちであった。その明眸も既にない。

このまちは日本の興隆とともに生まれ、その栄光とともに輝き、その敗亡とともに滅びた。行年僅かに四〇（一九〇五—四五）、数奇な一生というべきである。敗戦によってすべてを自ら免責した日本はフェニックスとなって立ち上がった。しかしわれわれは、再びこのまちの甦りを聞くことがない。

現代に生きる日本人にとって、このまちの名は、まさしく忘却に値する。理非を問うよりも、まず忘れることの大切な時代だからである。一切の理非に平和の絶対が超越する時代だからである。死ぬことさえも忘れたフェニックスは、理想の廃墟の上にこそ翔ける鳥であろう。その韜晦の理念は、

「汝、この刹那に生きよ！」

という没価値的な標語であらねばならない。

戦争も平和も、今では、この魂の砂漠と概念の混沌をさまよう亡霊に過ぎない。生と死の意味的な距離を見失なった同義反覆がそこにある。生まれた時から既に蛇足でしかないサルトル的な人生がそこにある。大量生産の生と、大量消費の死の他には、生きようも死にようもない、すこぶる経済学的な散文がそこにある。

それが現代である。それ故にこそ、わたしはこのまちを語ろうと思う。理想への情熱が何を創ったか、平凡な人間が、生と死の散文を軽蔑したとき、何を為しえたかを見ようと思う。生と死は存在で

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

はない。それは目的であり、人生の宿題である。宿題ならいのちの限り書かねばならぬ。人生に何も書かないのが現代なら、何かを書いてある人生は貴重であろう。少なくとも、白紙の答案よりは退屈しないに違いない。

わたしはいま、二十世紀の前半を生きたこのまちを語ろうと思う。このまちを創り、このまちに生き、このまちに命を与え、またこのまちが眺めてきた、さまざまな人生を振り返ろうと思う。まちを創るということは、人生を創ることであろう。この簡単な論理すら理解されない物神的な社会が現代ならば、それは確かに語るに値する。

それはまた、ただ遠い幸福な日の想い出のためのみではない。人生の終わりに墓標のあるように、一つのまちの歴史の果てにも、そこに佇(たたず)むものの想いがなければならない。星霜二十年、既に遠い。蔽った土が冷え果てようとするならば、わたしは彼女について語らねばならない。

しかしこの物語りは、必ずしも史実に忠実な大連の年代記(クロニーク)でもない。それならば史家の研究を待てば足りる。わたしは大連でなければ生まれない人生、大連に生きなければ謳(うた)えない叙事詩(バラーデ)、大連を愛さなければついに語られない路傍の花や、風の囁(ささや)きや、雪解(げ)のにおいをまた、ここにとどめておきたいと思う。

理念とともに去ったこのまちの名は、いまも中共の辺域にある。飛べば二時間、船なら二日の行程である。しかし、この行程の政治的距離は、今もなお、月に往くよりさらに遠い。そして、それはもちろん、わたしの語ろうとする亡びたまちのことではない。

わたしは大連に生まれた。そして今日、わたしは人生の後半を日本の大都会の片隅に過している。思えば、この片隅の生活は、わたしが大連とともに育った歳月よりも既に長い。だが、わたしの心を絶えず吹き抜ける凩のような疎外感は、いったい何故だろうか？　それは大都会の疎外感とも、また、いわゆる、あの戦中派のそれとも違っている。女々しい望郷の傷心では更にない。妻にも子にもわからない心の空しさである。わたしは、いまようやくそのわけに気づこうとしている。

わたしの心には、ある名もない民族の影がある。この民族は、日本の血を満洲の風土の上に培った新生の血である。アメリカ人の血管にアメリカ大陸が流れているように、この民族の体内には満洲が流れている。ヨーロッパやアフリカの血を享けたアメリカ人が一つの民族ならば、われわれもまた、一つの民族である他はない。それは歴史の一瞬に生きた泡であり、歴史の気紛れな冗談かも知れない。しかし、その一瞬に投げ込まれた者にとっては、血に加えられた投影の重さは決して冗談ではありえない。日本人なら忘れてしまえばすむ。しかし満洲に生まれたわれわれは、その忘れてすまされようとする歴史そのものだからである。日本人の投げ込んだ歴史の屑籠から、事大的な評価を超えて飛び出した存在そのものだからである。ここに新生の血にとって避けられない母国からの訣別がある。

引揚者にとって、満洲での半生は、あるいは補償されるべき真空だったかも知れない。それでも彼らにはまだ、人生の残りを完結しうる故郷がある。われわれの魂にはそれがない。何処に住もうと放浪の異邦人である。世界史がそのカタコトの正義によって、その行跡の始末をどのようにつけようと、われわれの心に沁みた地図までも塗り替えることはできない。それはわれわれ自身によってすらも、

できないことだからである。

わたしの心を飄々と吹き抜けるこの空しさは、わたしが人生の主役となる風土を持たないこと、言いかえれば、わたしが茫漠の国に生まれ、この2DKのような国に起こる出来事のついの傍観者に過ぎないからでもあろう。

わたしは一九一九年の夏、大連に生まれた。だから、この物語りはまた、このような異邦人の語る失なわれた故郷の話でもある。

一九六八年七月

名古屋の仮寓にて

城島國弘

はしがき　i

第一部　冬の旅

戦争と平和　5

会議は踊る　15

崩れ行く帝国　40

敵艦見ゆ　72

崑崙（こんろん）の玉（ぎょく）　107

ヴィーナスの誕生　151

邯鄲（クレムリン）の夢　181

明治の栄光　205

トロイカ　221

五族協和　231

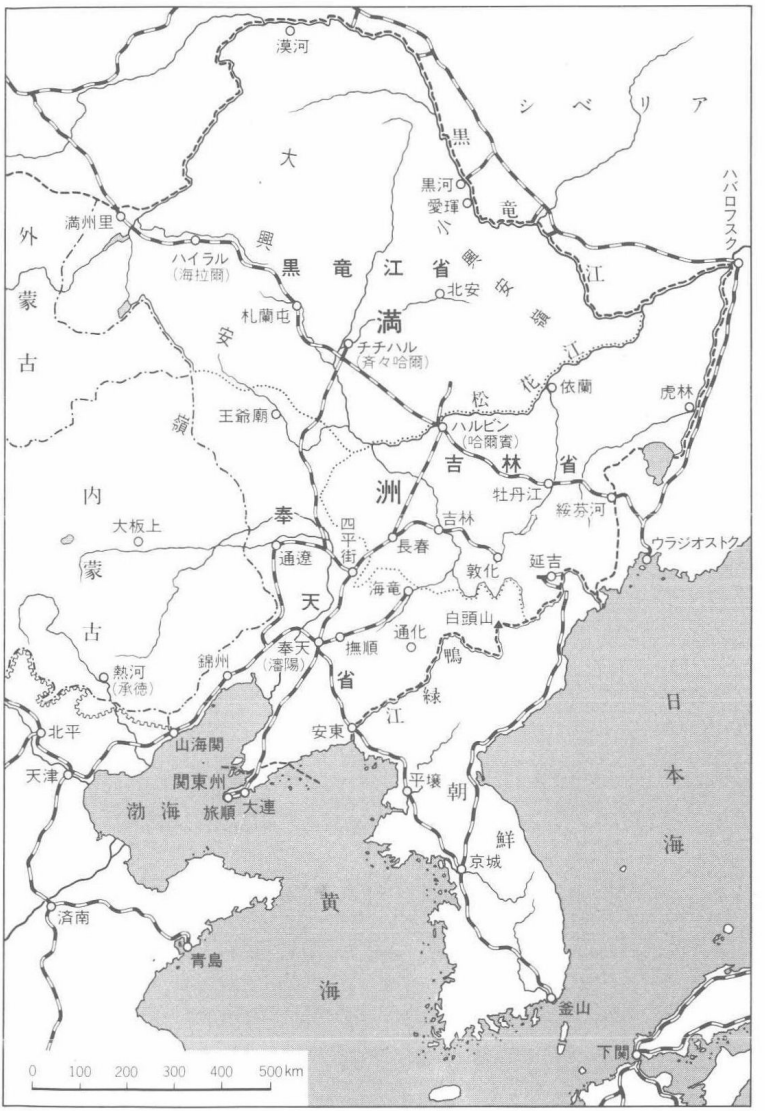
第二部　早春賦

霧の国の人々（ニーベルンゲン）　267
ハルツームに死す　277
霧の夜のメルヘン　284
謀略　303
森蔭　313
秘密　323
訣別　349
新生　359
あとがき　367

大連港

――ありし都の物語

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com


漠河
シベリア
大
興
安
嶺
黒
竜
江
省
黒河
愛琿
黒
竜
江
ハバロフスク
満州里
外
蒙
古
ハイラル
(海拉爾)
北安
札蘭屯
満
チチハル
(齊々哈爾)
松
花
江
依蘭
虎林
王爺廟
ハルビン
(哈爾賓)
吉
林
省
内
蒙
古
大板上
奉
天
省
四
平
街
吉林
牡丹江
綏芬河
ウラジオストク
通遼
長春
敦化
延吉
海竜
白頭山
通化
撫順
鴨
綠
江
錦州
奉天
(瀋陽)
熱河
(承德)
北平
山海関
安東
日
本
海
天津
関東州
旅順
大連
渤
海
平壤
朝
鮮
京城
黄
海
済南
青島
釜山
下関
0 100 200 300 400 500km

第一部　冬の旅

戦争と平和

〝満洲をどうするか？〟

二十世紀の初頭から、半世紀にわたって日本列島を吹きまくってきた大颱風の渦の中心はこれだった。字数にして十文字にみたない、たったこれだけの素朴な問いかけが、日本の現代史のすべてであった。

この問いかけが、さかまく怒濤を呼び起こし、日本人のひとりびとりに、悲劇と喜劇と、血と涙と笑いと、夢や希望と失望の歴史を綴らせた。

颱風は去った。踊り狂い疲れ果てて、いまその跡を眺めてみると、さまざまな感慨が湧いてくる。〝満洲をどうする？〟それは理想を見失なった民族が、新たな理想を求めて悶え苦しむ悲痛な叫びでもあった。

いったい〝理想〟とはなんだろう？　それは満たされないものへの憧れである。鰯の頭さえも信ずれば後光がさす。憧れが〝鰯の頭〟となれば、それは理念である。これが五〇年の苦闘ののち、われ

われが学び取った実践的な理解であろう。不満、悩み、苦痛、屈辱、劣等感、危機感が理想の母である。人生への油っこいドロドロした執着が理想の父である。

理想はまた、現状に我慢のならないもろもろの否定的要素を発見する能力でもある。平和や幸福な生活は、現にそれがないと人々が知ったとき理想となる。しかし、それが与えられてしまえば、もはや理想ではない。つまり、平和は理想の終着駅であり、理念の墓場である。

およそ人びとにとって、何がいまいましいといって、平和や幸福な生活ほど、いまいましいものはあるまい。そこには、平和でないもの幸福でないものを、見出そうにも見出せないもどかしさ、平和でも幸福でもない当人が他人からはそう見られる腹立たしさ、当人がそれを見出したとしても、それを他人が認めてくれないいらだたしさ、つまりは不満が発見できない、他人に承認されないという次元の高い不満が、爆発したくとも爆発できない濃度で充満しているからである。

日露戦争が終わって平和が恢復したとき、日本はこのディレンマに否応なしに落ち込んでいた。

〝満洲をどうする？〟早くも平和のアンニュイに悩み始めていた政府の大官達の答えは、当然にさまざまだった。

〝満洲なんかどうだっていいさ！〟吐いて捨てるようにまずこう答えたのは、戦時内閣の首相として、日本で一番ホッとした桂太郎である。伊藤博文も井上馨も全く同感だった。

〝満洲〟と聞いただけでジンマシンの出そうだったこの元老達は、アメリカから鉄道屋のハリマンがやってきて、「どうだ、満鉄を売らんかね？」と持ちかけたとき、もう一度ホッとして、地獄に仏と

感激した。下にも置かず大いに歓待して、「どうも、どうも。御用の節はまたどうぞ」と、バナナのタタキ売りのような仮証文を持たせて帰したのは、ポーツマスでの講和締結（明治三十八年〈一九〇五〉九月五日）からやっと一ケ月目の十月十二日のことである。

〝賠償金は一文も取れなかった。二十億の戦費と死傷十五万の将兵に対する弔慰金、征露百万の論功行賞が払えんでは、国民に申し訳が立たん〟というのが、売却の理由である。

その元老達も、ハリマンと入れ違いに帰国した小村全権の激怒に逢うと、さすがに狼狽した。

「この話が国民に洩れると、日比谷の焼打ちぐらいではすみませんぞ。あなた方の命がいくらあっても足りませぬぞ！」

と、小村に脅かされたのがこたえたのである。契約の朝令は、小村が横浜に上陸してから、わずか三日ののち、十月十九日には暮改された。そして同二十七日に、サン・フランシスコにご機嫌で上陸したハリマンを待っていたのは、一件破約の通告であった。

いくら策略が身上の外交でも、〝ほんとかね？〟と言いたくなるような醜態だが、一国の首相の約束だけに、〝ごめんなさい〟ですむ話ではない。当然ながら、アメリカは怒った。アメリカとしては、〝講和の口利き料に、それくらいの謝礼はあたりまえだ〟と思っていたから、なおさらである。

これがアメリカの日本に対する怒り始めであった。以来、もう怒りっ放しで、とうとう、昭和二十年までどなり続けた。こうなるとハリマン事件も、単に元老達の耄碌ばなしのエピソードではすまされなくなってくる。

現代は、個人が社会や歴史の中に埋没して消え去る時代である。だが、国の運命や民族の歴史が一

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com